普段どおりの生活を送りながら有症状時の心電図を記録し安心につながった例

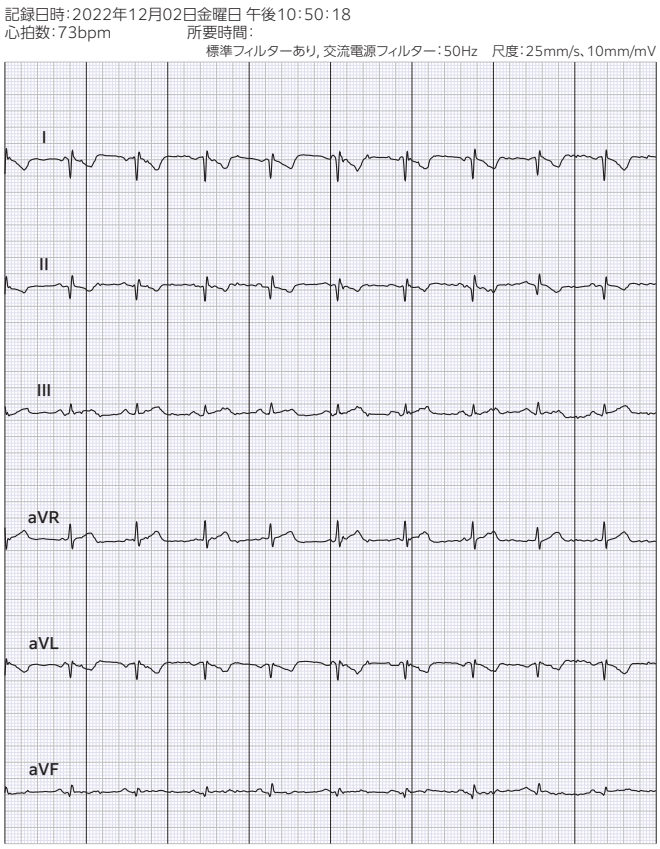
のぞみハートクリニック　岡田 健一郎 院長

症 例

症　例：62歳、男性
主　訴：動悸
既往歴：特記事項なし
現病歴：特記事項なし

携帯型心電計の使用

動悸を訴え、当院に初診で受診された。動悸の自覚は約10年前から断続的にあるとのことであった。初診時、12誘導心電図検査を施行したが不整脈は検出できず、心エコー上も器質的な異常は見られなかった。後日ホルター心電図検査を行ったが、「検査中はたまたま動悸が少なかった」と発言があり、上室性期外収縮を記録できていたものの235回/日程度であった。普段はもっと動悸があるとのことだったので、自覚症状のある時に記録してもらうことを目的として、オムロンヘルスケア社製携帯型心電計の貸し出しを提案したところ、使用を強く希望した。2022年9月26日から12月9日までの75日間で36回記録され、携帯型心電計の解析上は全て「正常な洞調律」であった。再診時、波形の解析を行うと上室性期外収縮のみであり、経過観察とした。



解析結果：正常な洞調律

考 察

本症例の患者さんは、飲酒後によく動悸を自覚するとのことだった。この患者さんに限らず、ホルター心電計を装着している間は飲酒を控え、普段より規則正しい生活を心がける患者さんは多い。そのため、装着していない時よりも症状が出現しないことがある。本携帯型心電計は、日常生活のなかで使うことをベースとしているため、症状出現時の波形の記録と併せて、どのタイミングでまたは何をトリガーとして胸部症状が出現するのか、といったことも検討できる。日々を過ごすなかで胸部症状が出現すると不安が強くなることも多い。しかし本症例の場合は、「正常な洞調律」という解析結果をすぐに知ることができたため、安心につながっていたと考えられる。